

酷暑の日中を避け、早朝に陸上の練習に励む難民たち。制約の多い難民キャンプの生活において、若者たちに活力を与えているのがスポーツだ。

Republic of Kenya

EARTH GALLERY Vol.144 [ケニア共和国]

地球ギャラリー

写真文・渋谷敦志(写真家)



ポジティブのすすめ



ユニフォームを着て得意のリフティングを披露するトムさん。



夕方、キャンプの一角でバスケットボールの練習をする難民たち。



トゥクルと呼ばれる伝統的な土壁の住居。



練習を終えた陸上選手たちを囲んで、体操を真似る子どもたち。子どもたちにとってスポーツ選手は憧れの存在だ。



国連難民高等弁務官事務所 (UNHCR) から支給されたポリタンクを手に水くみに行く女性たち。



トムさん(左端)の兄弟で母親を囲む。



トムさんがカクマのサッカーチーム「カクマ・ユナイテッド」のメンバーだったころ。同じページには姉のローズさんの写真も。

標高2,400メートルの高地イテン。
眼下にアフリカ大地溝帯が横たわる。



イテンのトラックで走るローズ・ナティケ・ロコニエンさん(右)。
リオ五輪の陸上女子800メートルに難民選手団として出場し、
開会式では旗手も務めた。

今年2月、ケニア北西部にある南スーダンとの国境に近いカクマキャンプを訪れた。地元民が住むカクマタウンと難民が住むカクマキャンプを分けるタラック川が1月に増水し、キャンプ側の低地が浸水したと聞いた。ところが、雨季が終わった2月は水なし川で、干上がった川底は、トゥルカナ族の人びとにはヤギの放牧地、難民の子どもたちにはサツカー場となっていた。カクマキャンプの古い地区の目抜き通りには、数多くの商店が軒を連ねる。バイクや車が行き交う喧騒は、難民キャンプというよりはもはや町だ。それがカクマの第一印象だった。

カクマに「難」をしのぐ避難所ができたのは1992年。スーダン南部(現在の南スーダン)で暴力や迫害を受けた人びとが、ケニア側に越境してきたのがきっかけだ。いまでは南スーダン、コンゴ、エチオピア、ルワンダ、ウガンダなど19もの国籍の人たちが交じり合うコスモポリタンな場所だが、カクマの人口約20万で多数を占めるのは、いままも南スーダンからの難民だ。

「世界で一番新しい国」南スーダンをこの目で確かめようと2013年に訪れたことがある。スーダンから独立したのは11年で、首都ジュバには長年の戦争で荒廃した国土を復興する槌音が響いていた。そんな平和もつかの間、13年末に反政府勢力との間で戦闘が再燃。17年には北部

地域が飢饉に陥り、約400万人が家を追われて国内外へ逃れた。帰還できる見通しは立たず、一時的なはずだった避難生活が4半世紀以上におよぶ人も多い。カクマで生まれ育った第2、第3世代は母国を知らず、どこ出身かも曖昧なまま、アイデンティティの喪失に悩む者もいるという。

「カクマの意味は、nowhere(どこでもない場所)なのです。どこでもない場所だけど、私にはhome(ふるさと)です」と言ったのは南スーダン難民のトムさんだ。彼が幼いころ村が何者かに襲撃され、父親に連れられてカクマに逃れてきたのが2002年。以来、両親と兄弟の9人でカクマに住む。「ここで歳をとるのを待つのはつらい。将来に希望や夢を持つのは簡単じゃない。でもポジティブ・シンキングが重要」。トムさんにかぎらず、カクマの若者から「ポジティブ」という言葉を何度か耳にした。「強がりではなく、本当にポジティブなのだろうか」と思いつつ尋ねると、「ポジティブな態度を持つことで私たちのチャンスが増える」と言う。実はその言葉には少し胸が痛かった。こちら側の意識に潜む難民へのネガティブな視点の裏返しに思えたからだ。今も原稿を書きながら、その言葉を反芻する。

土壁に草葺き屋根のトゥクルという伝統的な住居を外で撮影していると、サツ

カーのユニフォームに着替えたトムさんが出てきてリフティングを始めた。見事なボールさばきに近所の子どもたちは大はしゃぎだ。難民という足かせがあったとしても、自分がなにかをできる人間であることを見せる、そんな意気込みを写真に収めようとシャッターを切った。

彼のポジティブさは、姉のローズさんの影響も大きいに違いない。ローズさんはリオデジャネイロ五輪の陸上女子800メートルに難民選手団の一員として出場している。彼女とは、リフトバレー州の高地イテンで会うことができた。他の選手と合宿生活を送りながら、東京五輪を目指して練習に励んでいた。ひたすら前へ。何かを追い求めて走る彼女の姿は、まさにポジティブさの象徴だった。「次は東京で」と言って別れた後、世界はまたたくまにコロナ禍に見舞われ、五輪は延期となった。それでもローズさんはあきらめない。カクマでの練習の様子をSNSで発信する。「ポジティブに考え、ステイ・ストロングでいます。スポーツは私にとってすべてであり、世界中の難民に希望を与えてくれるものなのです」。

渋谷敦志(しゅや かつし)
写真家、フォトジャーナリスト。立命館大学産業社会学部、英国 Leeds College of Printing 卒業。世界中の紛争や災害、貧困、人権の問題を写真と言葉で伝えている。東京在住。近著に『みんなたいせつ 世界人権宣言の絵本』(岩崎書店)、『まなざしが出会う場所へ―越境する写真家として生きる』(新泉社)がある。

取材協力：UNHCRケニア、国連UNHCR協会



左：ローズさんとともに練習に励む選手たち。右：マラソンキャンプの宿舎。